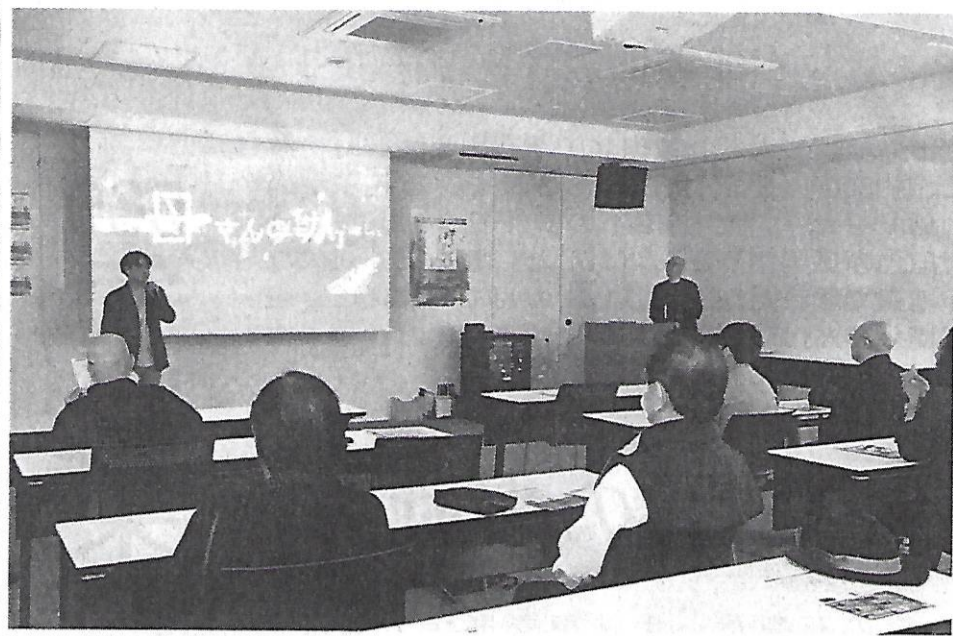


# 九州初、JCF学生映画祭

## 入賞6作品など上映

奄美市



第17回JCF学生映画祭 in奄美大島&与路島(同実行委員会主催、高秀蘭委員長)のコンペティション部門「学生映画アワード」の入賞作品が決まり、奄美市名瀬のアマホームPLAZA(市民交流センター)で24日、上映会が開かれた。同祭の九州開催は初。

1999年、美術系大学や専門学校、映画研究会の学生らの「才能の発掘と育成」をコンセプトに掲げ、北海道夕張市で始まった。第17回は「夢は続く」卒業

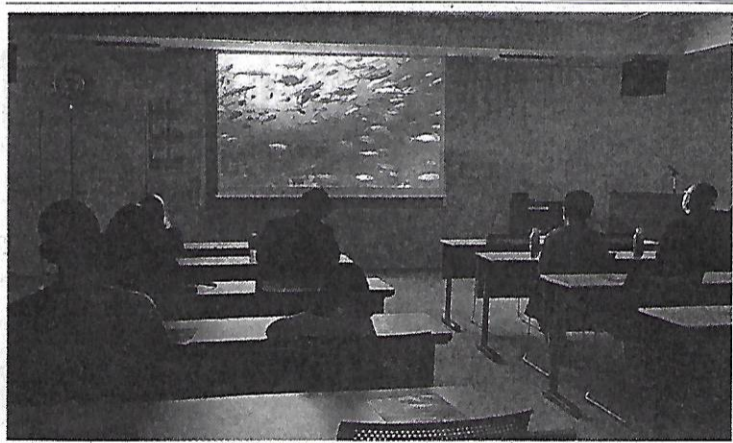
と門出」がテーマ。全国から応募111点と招待ノミネート2点の計113作品が寄せられ、カメラワークの上手さで審査員から高評価を得た、成蹊大学4年の渡部拓人監督「端くれ」がグランプリに輝いた。上映会ではグランプリを含む入賞6作品のほか、第14回準グランプリ作「アマミノクロウサギ保護啓発ムービー」(長尾敦史監督)や与路小中学校の児童生徒による島口劇「とりのヨロ」なども上映され、来場者らは若き監督たちの才能や島の魅力あふれる作品に

見入った。会場には、初監督作「母さんの『か』」で入賞した北海道情報大学2年の武藤樂さんも来場。「親への感謝を形にした作品が入賞し、また多くの方に見ていただき、本当にうれしい。いつか奄美を舞台にした作品も撮りたい」と語った。映画祭のコンセプトに魅かれて来場したという奄美市の川口秀美さんは「島では、夢にチャレンジしている学生さんたちの作品を見る機会があまりないので、良い刺激になった」と話した。

## プラスチック汚染 映像で提起

### 学生映画祭で特別上映

奄美市



プラスチック汚染への取り組みへの様子が描かれた作品が特別上映された(24日、奄美市名瀬)

第17回「JCF学生映画祭」(同実行委員会主催)が23、24の両日、奄美市名瀬のアマホームPLAZA(市民交流センター)であった。24日は、特別招待作品「マイクロプラスチック・ストーリー」では8、9日、与路島くぼくらが作る2050年(佐竹敦子監督、2019年制作)を上映。海洋環境や生態系への影響が指摘されるプラスチック汚染

への小学生による取り組みとして公開された。作品は、ニューヨーク市ブルックリンにある第15小学校の5年生たちによる環境汚染への取り組みを2年間追ったドキュメンタリー映画。世界の44映画祭

で八つの賞を受賞している。マイクロプラスチックは直径5ミリのプラスチック粒子で、世界中の海で51兆個存在しているとされ、作品では、飲み物、空気中にも含まれていると指摘。子どもたちがプラスチック製品の回収活動をやめ、リサイクルだけで解決するかなど議論する様子や地域を巻き込んだ取り組みが描かれている。鑑賞した奄美市名瀬の女性(60歳代)は「自分が子どもの頃は、公害などなかった。未来の子どもたちに何かできることがあれば」と話した。今回、与路島で宿泊環境保全事業などに取り組む同実行委員の太田雅人さん(58)との縁で奄美地方での開催が実現。太田さんは「世界遺産登録地として自然、野生動物など保全に関する特別企画として上映した。問題提起の一つとして、映像の力で問うことができれば」と語った。